

# 『星の王子さま』の読みへの招待(三)

## 目次

はじめに

### 第一部 愛の修業——王子さまの彷徨と探求

#### 第一章 王子さまの出発

#### 第二章 星めぐり

#### 第三章 地球での王子さま

(1) 王子さまの孤独の深化

(2) キツネの教え

(3) 王子さまの変貌

### 第二部 愛の福音

#### 第一章 王子さまとの出会い

(1)  $\wedge$   $\bowtie$   $\vee$  の孤立と孤独

(2) 王子さまと  $\wedge$   $\bowtie$   $\vee$  との類縁性

(3) 王子さまと  $\wedge$   $\bowtie$   $\vee$  とのへだたり

井上三朗

(4) 出会いの意味

(5) 他の人物たちにとっての王子さま

第二章 王子さまとは誰か

おわりに

(太字は今回掲載分)

## 第一部 愛の修業——王子さまの彷徨と探求

### 第三章 地球での王子さま

(2) キツネの教え

第二十一章の、王子さまとキツネとの出会いの場面を分析することにしよう。まず最初に、キツネが王子さまと同じく、孤独のなかに置かれており、 $\wedge$ とともに $\vee$ あるいは $\wedge$ のために $\vee$ 生きべき他者がキツネにおいて不在であるという事実を確認しておきたい。王子さまの前に出現したキツネは、自分の現状を、こう要約している。

「おれの生活は同じことの繰り返しだ。おれがニワトリを追いたてると、人間どもがおれを追いたてる。ニワトリがみんな似たりよつたりなら、人間どももみんな似たりよつたりだ。それでおれは、少々たいくつしてるんだ。だけど、もし君がおれを飼いならしてくれたら、おれの生活はお日さまがあたったようになるだろう」(一九四頁)。

キツネはニワトリを追いかけて、人間たちから追いかけるだけの、単調な日々を送っている。砂漠での変化のない、退屈な生活、ということはすなわち、孤独の生活——そんな生活から抜け出るために、キツネは王子さまに友情ないし愛情を

もとめる。「もし君がおれを飼いならしてくれたら、おれの生活はお日さまがあたつたようになるだろう」というさいごの発話は、求愛のせりふとうけとれる。第二十一章の、キツネが王子さまと対峙する場面全体は、結局のところ、孤独な暮らしをつづけるキツネの、王子さまへの求愛の場面とみることができるといえる。

もつとも、キツネの言葉は、長い瞑想に裏打ちされた、含蓄のあることばである。山崎庸一郎氏は『星の王子さまの秘密』のなかで、このキツネが、「 $\wedge$ ずるがしい $\vee$ 」という伝統的な意味作用をよいほうに変え、もつと積極的に、 $\wedge$ 賢さ $\vee$ 、 $\wedge$ 知恵 $\vee$ をあらわしているようだと推測している。『 $\wedge$ ころで読む「星の王子さま」』を書いた柳沢淑枝氏は、このキツネから「砂漠の賢者」<sup>(3)</sup>を観察している。キツネは孤独から脱却する方法として、貴重な秘密を王子さまにさずけている。キツネは王子さまにたいして、 $\wedge$ 人生の教師 $\vee$ という役割を果たしている。キツネの談話は、中谷拓士氏が「内面のルポタージュとしての Le Petit Prince」のなかで指摘しているように、三つの主要テーマによって構成される。<sup>(4)</sup>この主要テーマからは三つの教訓が浮かび上がってくる。ここで、中谷氏の分類にしたがって、キツネの教えを三つの観点から吟味することにした。第一の教訓は、「飼いならすこと」(apprivoiser)の重要性である。「飼いならす」という単語は、 $\wedge$ 手なずける $\vee$ といった意味があるように、受けとり方しただけでは悪い語感をもつ。しかしキツネはこの動詞にちがった意味をこめていいる。「飼いならす」とは、キツネの定義によれば、「絆をつくること」(créer des liens) (二九四頁)である。キツネは王子さまに、「君のバラの花がとてみたいせつなものになるのは、君がそのバラの花のために時間をむだにしたからだよ」(二九八頁)と知らせている。「飼いならす」とは、誰かのために時間をむだにすることでもある。では、飼いならす／飼いならされるといふ関係が二者のあいだに成立すると、どうなるのか。キツネは言う。

「君はまだおれにとって、ほかの十万もの男の子とまったくおんなじの男の子にすぎない。それでおれは君を必要としない。君だって、同様におれを必要としない。おれは君にとって、ほかの十万ものキツネとおなじ一匹のキツネなんだ。だけど、君がおれを飼いならすと、おれたちはたがいに必要となるんだ。君はおれにとって、世界でたった一人のもの

になるし、おれは君にとって、世界でかけがえのないものになるだろう……」(二九四頁)。

飼いならず／飼いなされるという関係ができると、二人はたがいに相手が必要とするようになり、世界中でただひとりの、あるいはかけがえのない存在、つまりuniqueな存在をもつことになる、とキツネは洞察している。uniqueな存在を見いだすとは、へのために√またはへとともに√生きるべき他者を発見することである。uniqueな存在をもつとき、当然のことながら、孤独感は無消ないし軽減する。それゆえ、誰かを飼いならずことは、孤独から脱出するための有力かつ強力な手段となりうる。

第二の教訓は、飼いならず／飼いなされるという関係が成り立つことによって、換言すれば、uniqueな存在が見いだされることによって、へひろがり√(étendue)が生じ、世界が変貌するということである。キツネは、王子さまが自分を飼いならした場合の生活の変化を思い浮かべている。

「それにごらんよ。あそこに麦畑が見えるだろ。おれはパンなんか食べない。おれには、麦なんて、なんにもなりやしない。麦畑を見たところで、なんにも思い出しはしない。それにあれを見ると、気がふさぐんだ。だけど、君は金色の髪をしている。だから君がおれを飼いならしてくれたら、それはすばらしいものになるだろう。麦は金色なので、君のことを思い出させてくれるだろう。それに麦に吹く風の音も好きになるだろう……」(二九五頁)。

キツネはパンを食べないので、麦畑はなんの興味もそらない。だが王子さまとのあいだに、飼いならず／飼いなされるといふ関係が生まれると、麦は金色の色彩によって、王子さまの金色の髪を思い出させるがゆえに、すばらしいものに見えるようになる、キツネは予想している。ここでは、uniqueな存在をもつことによるへひろがり√の発見、世界の変容が問題になっている。今まで意識しなかった事物がuniqueな存在の属性と結びつくことで、美しい、価値あるものに見えてくるといふ、へひろがり√の生成の体験が語られている。ピエール・アンリ・シモンによれば、サン・テグジュペリにおいて、へひろがり√(étendue)とは、「測定可能な、客観的世界」<sup>(5)</sup>としてのへ空間√(espace)と対をなす語であり、「意識のなか

の、その空間の投影<sup>(5)</sup>である。山崎庸一郎氏は、この *étendue* を「内的空間」と訳し、それにたいして *espace* には、「外的空間」という訳語を与えている。<sup>(6)</sup> *unique* な存在に出会うことは、単なる  $\wedge$  外的空間  $\vee$  (*espace*) である世界が意識のなかで変容し、 $\wedge$  ひろがり  $\parallel$  内的空間  $\vee$  (*étendue*) が形成されることにつながる。

第三の教えは、今までの二つの教訓を包括・総合するかたちでキツネがさいごに宣べ伝える秘密、すなわち、「かんじんなことは、目には見えない (*L'essentiel est invisible pour les yeux.*)」(二九八頁) という言葉の中に存する。この言葉は作中、「心でしか、もの<sup>(7)</sup>とはよく見えない (*On ne voit bien qu'avec le cœur.*)」(二九八頁) とも言いかえられている。この教えは、王子さまがキツネと別れる間際、庭に咲き誇るバラの花たちのところへもう一度行くというエピソードと照らし合わせることによって、いっそう納得しやすくなる。前節で見たように、キツネと出会う以前、王子さまは庭の中の五千本のバラの花たちに遭遇する。そして自分の星に生存するバラがただ一つのバラではなく、ごくありふれた、どこにでもある花と同じであることを知り、泣く。だがキツネと邂逅してからは、自分の星にいるバラが、見かけはほかのバラと同じだとしても、自分が世話した花だという意味において、ただ一本の、かけがえのない花であるということを悟る。五千本のバラを前にして、王子さまは自分のバラへの思いを、こう披瀝している。

「もちろん、ぼくのバラは、そばを通って行くふつうの人が見たら、君たちと同じ花だと思うことだろう。だけどぼくのバラは、ただそれだけで、君たちみんなよりもたいせつなんだ。だって、ぼくが水をかけてやったのはそのバラなんだからね。覆いガラスをかけてやったのはそのバラなんだからね。ついたてでまもってやったのもそのバラなんだからね」(二九八頁)。

王子さまにとって、自分の星にいるバラは、もはや、庭に咲き誇る五千本のバラと同じではない。王子さまと彼のバラとのあいだには、飼いならず／飼いならされるという関係が生成しているがゆえに、あるいはまた、王子さまが自分のバラのために「時間をむだにした」がゆえに、王子さまのバラの花は、他のバラの花とは区別され、異化され、ただひとつの、か

けがえのない存在となる。別の表現を用いれば、 $\wedge$ とともに $\vee$ または $\wedge$ のために $\vee$ 生きるべき他者となる。とすれば、キツネの断言するように、「かんじんなこと」が、目に見える世界、見かけの世界に存在するのではなく、「目には見えない」世界に属することはたやすく了解されるし、目ではなく、「心でしか、ものごとはよく見えない」ということも、容易に首肯することができる。

「かんじんなことは、目には見えない」というキツネの教えは、『星の王子さま』の中心思想を言い表わしているように思われる。作品の冒頭に置かれた、ゾウを呑みこんだボアの絵の挿話、すなわち、開いたボア（ボアの内側）の絵はわかって、閉じたボア（ボアの外側）を描いた絵を大人たちが理解しないという挿話の意味するものは、「かんじんなことは、目には見えない」ということであろう。第二章で、飛行士の $\wedge$ は $\vee$ に、ヒツジの絵をかいてとせがんだ王子さまが、穴のあった箱の絵を見てようやく満足するというエピソードにしても、その意味するものは同じである。つまるところ、この童話全体が、「かんじんなことは、目には見えない」という命題に収斂し、この命題をめぐる、作品は構成されているようにみえる。

ここで、「かんじんなことは、目には見えない」という文句の意味を、もう少し考察しておきたい。いったい、「かんじんなこと」(l'essentiel)とは何なのだろうか。「目には見えない」もの、invisibleなものとは何なのだろうか。何がessentielなもの、invisibleなものになりうるのか。この点にかんして、ルドルフ・プロット氏は『星の王子さまと「心のきょう育」』のなかで、「『見えざる世界』を悟った人は、現実の世界を違った目で見るのです。肉眼で『見えざる世界』とは人間の独特な『心の世界』のことです」との意見を開陳している。プロット氏はinvisibleなものを、人間の心の領域に属するものと認識している。この認識を踏まえると、essentielなもの、invisibleなものとは、愛 (l'amour) であると解せないであろうか。

L'essentiel est invisible pour les yeux. とキツネが口にするときの、l'essentielあるいはinvisibleなる語はl'amourという語と交換可能な、等価なものと思われる。キツネの用いる「飼いならす」(apprivoiser) という動詞にしても、 $\wedge$ 愛する $\vee$  (aimer)

の同義語とうけとれる。キツネの三つの教えは、畢竟、愛（すること）の意味ないし意義を伝授したものにほかならない。したがって、『星の王子さま』において、一方では孤独が重要な構成要素となつていても、他方では、孤独と対立するかたちで愛が置かれていたのだと認定しうる。というより、作中、愛の主題は孤独の主題によつて浮き彫りにされ、いっそうの切実さを帯びて現前している。

ともあれ、キツネとの出会いによつて、王子さまは、自分の星に住むバラの花が *unique* な存在であることを思い知る。「君は飼ひならしたあいてに、いつまでも責任があるんだ。君は、君のバラにたいして責任があるんだ」（三〇〇頁）と、キツネからさとされた王子さまは、彷徨と探求の旅を終え、バラが待つ故郷の星に帰還する決意を固めていくことになる。

### （3）王子さまの変貌

第二十二章以後の作品の展開を一瞥しておきたい。キツネと別れたあと、王子さまはキツネの教えを完全に自分のものにしていく。このことは端的には、第二十六章、王子さまが飛行士のへぼくVに、「たいせつなことは、目に見えないんだ……（*Ce qui est important, ça ne se voit pas...*）」（三二二頁）とつぶやいているところからわかる。使用する単語はちがうにせよ、王子さまはキツネの示した考えを繰り返している。同様に、第二十二章の転轍手（スイッチ・マン）とのやりとりからも、王子さまがキツネの感化を受けていることがうかがえる。王子さまは転轍小屋でスイッチ・マンを見かける。スイッチ・マンは、千人の乗客を乗せた特急列車の進行方向を決める仕事にたずさわっている。スイッチ・マンが特急列車の乗客について、「連中はあの中で眠っているか、そうでなければ、あくびしているんだ」（三〇一頁）と言ひ、「子どもたちだけが、窓ガラスに鼻をぺしゃんこにおしつけているんだ」（三〇一頁）と伝えたとき、王子さまは次のように思索をめぐらせる。

「——子どもたちだけが、自分の探しているものを知っているんだ、と王子さまは言いました。子どもたちは、ほろ切れでできた人形のためにひまつぶしするんだ。すると人形はとてみたいせつなものになるんだ。そしてもし人形をとり

あげられたら、子どもたちは泣いてしまうんだ……」(三〇一頁)。

引用した文章から、王子さまが、誰かあるいは何かのために「ひまつぶしすること、同じことであるが、「時間をむだにすること」の必要性を熟知していることがたしかめられる。王子さまは、「時間をむだにする」ことによって、「絆をつくる」ことができ、かけがえのない存在が得られることを知悉している。「もし人形をとりあげられたら、子どもたちは泣いてしまうんだ」というさいごの明察は、それを示している。

山崎庸一郎氏は第二十二章における、スイッチ・マンとの対話から、「現代のひたすら加速されてゆく機械文明にたいする批判<sup>8)</sup>」を読みとっている。この対話をつうじて、「加速されていく」文明にたいするアンチ・テーゼとして、「時間をむだにする」ことによる愛の生成の重要性が説かれている。スイッチ・マンとの会話を念頭に置きながら、王子さまは第二十五章で、「人びとは特急列車に乗りこむけど、いまではもう、何をさがしているのか、わからなくなっている。だからそわそわしたり、どうどうめくりなんかしてるんだよ」(三〇六頁)とへばくVに話している。矢幡洋氏は『星の王子さま』の心理学』のなかで、この発言を視野に入れて、「現代人は、もっと多く、もっと早く」というパワー感覚にとりつかれている。そのため人々は、たえまない過剰な活動性へと自らを駆り立てている」と指摘する<sup>9)</sup>。そのうえで、現代社会が、「ナルシズムを促進している」と断定する。たしかに、スピード化をもたらす現代社会は、人びとに時間をむだにすることの大切さを自覚させないがゆえに、人びとをナルシズムへと傾斜させているのかもしれない。現代社会における愛の不在が議論できるところであろう。『星の王子さま』はこうした状況のなかで、愛の復権の書としての価値を有している。

さて、第二十三章には、のどの渴きを癒やす丸薬を売る商人が登場する。この商人は、一週間に一粒ずつ、丸薬を飲めば、五十三分の時間の儉約になることを宣伝材料にして、あきないをしている。時間の節約をうたい文句にする商人にたいして、王子さまは、「で、その五十三分って時間をどうするの？」(三〇二頁)と問い返す。この問いかけの中には、時間を節約する大人たち、言いかえれば、時間をむだにしない大人たちへの痛烈な皮肉がこめられている。この皮肉は、『星の王子さま



からの警鐘』の著者、山本武信氏によれば、「スピード技術を開発」する「科学文明への痛烈なアイロニー」<sup>(1)</sup>である。山崎庸一郎氏は、「時間的効率の追求を至上命令とする現代文明にたいする批判」<sup>(2)</sup>を看取している。第二十三章の挿話は、第二十二章の特急列車の挿話の延長上にあり、愛を欠落させる現代文明を批判したものと受けとることができる。

第二十三章の終わりのところで、王子さまは、「もし五十三分つていう時間を自由に使えるんだったら、ぼくは泉のほうに、とてもゆっくりと歩いていくのになあ」(三〇二頁)と黙考している。王子さまは喉の渴きをとめる丸薬を飲むくらいだったら、泉にたどり着くのに時間をかけて、水を飲んだほうがよいと判じている。ここでの△泉▽は、次に出てくる△井戸▽とともに、象徴的な意味をになっている。第二十四章・第二十五章において、王子さまは、水の貯えのなくなった飛行士の△ぼく▽といっしょに、△井戸▽を探しに出かけ、とうとう砂漠のなかに△井戸▽を見つける。そのかん、王子さまは、「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているからだよ」(三〇三頁)と語っている。この△井戸▽と△泉▽は△水▽を内蔵している。△水▽とはいったい何なのか。この点についてまず論及したい。

王子さまは第二十四章で、「水は心にとってもよいものなのかもしれない」(三〇三頁)とつぶやいている。山崎庸一郎氏はこの推察を引きあいに出し、「水は物質としてのミスではなく、その背後にある意味作用を伴ったもの、つまり、象徴としての水なのだ」<sup>(3)</sup>と判定している。しかし山崎氏は、△水▽が何を象徴するかについて、明言を避けている。柳沢淑枝氏は、王子さまが「このころの奥」にいたく「精神的な渴望」を「いやすものの象徴」として、△水▽をとらえている。<sup>(4)</sup> ルドルフ・プロット氏も類似した見解を表明している。プロット氏は『星の王子さまの心』で、△水▽を、「ただの喉の渴きというよりも、人間の心の渴き」を「潤す」ものとみなし、<sup>(5)</sup> 『星の王子さま』と聖書』においては、この△水▽が、「生きる意義でもあれば、生きる喜びでもあって、私たちが生かしている力なのです」<sup>(6)</sup>と解している。いったい、人間の「心の渴き」をうるおすもの、人間を生かすものとしての△水▽とは何か。結論的にいえば、それは愛なのではないだろうか。作中、△沙漠▽が人間のこのころの孤独を表象していることは、すでに述べた。△水▽とは、孤独なこのころの渴きを癒やすものであると

考えられるがゆえに、愛の象徴だと理解しうる。とすれば、△砂漠▽が人間の孤独と対応するのにたいして、いのちの水を有する△泉▽や△井戸▽が、愛を表徴することは、言を俟たない。このことは、△井戸▽が王子さまと△ぼく▽とを結びつける働きをしていること、また、第二十五章で発見された井戸が、「ぼくたちがたどり着いた井戸は、サハラ砂漠にある井戸らしくありませんでした。サハラ砂漠の井戸は、ただの穴が砂地にほられているだけのものです。ぼくたちの発見した井戸は、村にあるような井戸でした。でもあたりには、村などひとつもありませんでした。ぼくは夢を見ているような気がしました」(二〇六頁)と記述されていること、砂漠の中にふつう見いだされるようなものではなく、現実離れたものであることから察することができるといえる。

キツネと別れてからの王子さまの変貌に、話をもどすことにしよう。王子さまは、第二十二章・第二十三章の挿話が示すように、「時間をむだにする」ことの大切さを承知している。飛行士の△ぼく▽には、「かんじんなことは、目には見えない」とのキツネの教えを繰り返している。要するに、王子さまはキツネとの別離のち、キツネの思想を血肉化し、身をもって生きている。王子さまの彷徨と探求の旅は、愛(すること)の意味ないし意義を会得するに至るまでの過程ととらえることができる。「星の王子さまを出迎えに……」を書いたピエール・シモンの言葉を借りるならば、王子さまの旅は、「感情教育」の軌跡である。別の言い方をすれば、それは△愛の修業▽の旅である。読者の私たちは、王子さまの旅を追体験することで、愛(すること)の意味または意義をたしかめることができる。『星の王子さま』は単に童話、子どものための読み物という次元を越えて、読者を△愛の修業▽へといざなう書物なのである。

けれども、ここでくれぐれも確認しておかなければならないのは、王子さまの帰郷が死をもつてなされるといふ点である。王子さまは生きたまま、バラのいる自分の星にもどるのではなく、ヘビに噛み殺されて帰る。王子さまの星への帰還は、聖書もしくはキリスト教世界のなかで、パラダイスを追放されたアダムの子孫である人間が、死んではじめてパラダイスにもどれることと類似しているかもしれない。前述のように、王子さまの旅は△愛の修業▽の旅である。とはいえ、王子さまが

愛（すること）の意味あるいは意義を悟ったとき、バラとともにすごした時間は、死とひきかえに帰郷がなされるがゆえに、失われた、あともどりすることができない時間となる。作品の劇的効果はここから生まれる。そして時間が取りもどせないからこそ、愛（すること）の意味ないし意義をわかることの重要性が読者の胸に切実なまでに感じられるのだし、だからこそ、『星の王子さま』は、△愛の修業▽の書としての性格をいっそう帯びてくるのである。

## 第二部 愛の福音

### 第一章 王子さまとの出会い

この論文の第一部では、王子さまの内面にそくするかたちで作品を読解し、王子さまの彷徨と探求の旅が△愛の修業▽の旅であると結論した。あわせて、『星の王子さま』が△愛の修業▽の書であると述べた。しかしながら、この童話は王子さまの彷徨と探求の旅を叙述しているとしても、同時に、飛行士であり、かつ語り手でもある△ぼく▽の、王子さまとの出会いの体験を語った物語でもある。そういうわけで、王子さまの内面に焦点を合わせながら作品を読むこととともに、王子さまを外側からとらえなおしつつ、作品を分析することが必要になってくる。つまり飛行士兼語り手の△ぼく▽にとって、王子さまとの出会いが何であったのか、そして王子さまが誰であるのか、誰でありうるのか、を検討することが不可欠なこととして要請される。この章では、まず△ぼく▽の孤立と孤独を瞥見する。そのあと、王子さまと△ぼく▽との類縁性、それから、へだたりを問題にする。そのうえで、△ぼく▽にとって、さらには、他の人物たちにとって、王子さまとの出会いが何であったか、何でありうるのかを考察したい。

## (1) へぼくVの孤立と孤独

『星の王子さま』は、飛行士兼語り手のへぼくVの、王子さまとの出会いを、ほぼ一週間という短い期間における王子さまとのまじわり、そして別れを物語った作品である。へぼくVにとっての出会いの意味を明らかにする前に、へぼくVが置かれている孤立と孤独に、まず目を向けておきたい。へぼくVの孤立は、王子さまとの出会いを体験することになるサハラ砂漠に、飛行機のエンジンの故障のために、へぼくVがひとりぼっちで投げ出されるといふ事実によって明示されている。第二章において、語り手のへぼくVはサハラ砂漠での自らの孤立を、次のように報告している。

「機関士も、乗客も乗せていませんでしたので、ぼくはむずかしい修理を、たったひとりで行ったのけようとなりました。ぼくにとつては、生きるか死ぬかの問題でした。かろうじて、一週間分の飲み水があるだけでした。

そこで、最初の日の晩、ぼくは人の住むいかなる土地からも千マイル離れた砂地で眠りました。ぼくは、難船したあげく、いかだに乗って大洋のまん中を漂流している人よりも、ずっと孤立していました」(二三七頁)。

このようにへぼくVは、飛行機がサハラ砂漠に不時着することによって、完全に孤立した状況に落ちこむ。もともと、へぼくVの孤立は、これがはじめてではない。それ以前にも、孤立のなかに身を置いていたことが、作品冒頭のボアの絵の挿話を読むことよつてわかる。六歳のころ、へぼくVは未開の森について書かれた本に触発されて、ゾウを呑みこんだボアを外側から描いた絵をかき、大人たちに見せる。しかし大人たちの目には、その絵は帽子の絵にしか映らない。そこでへぼくVはボアの内側を描いた絵を作成し、大人たちの理解をもとめる。だが大人たちはへぼくVに、ボアの絵など打ち棄ててしまひ、「地理や歴史や計算や文法」に「興味をもつ」よう忠告する(二三六頁)。へぼくVにとって、大人たちはうわべ見かけでしかものごとを判断できない人間であり、現実生活において即物的な次元で役立つものしか評価しない存在なのである。そんな大人たちに囲まれて、へぼくVは孤立し、画家への道を断念し、飛行士になることを選ぶ。そしてほんとうの意味で

語りあえ、心底からわかりあえる友だちを持たないまま、孤独のうちに生きてきた。第二章の書き出しで、へぼくVは顧みている。

「そんなわけではなく、六年まえ、サハラ砂漠で飛行機が故障するまで、ほんとうの意味での話し相手を、誰も持たないままに、ひとりきりで暮らしてきたのです」（二三七頁）。

へぼくVは大人たちのただ中で孤立し、孤独意識をいだいてきた。サハラ砂漠への不時着は、それまでのへぼくVの孤立と孤独の延長上にあり、これを完璧なものにする出来事としてある。王子さまはこうしたなかで出現し、「ヒツジの絵をかいて」（二三七頁）とへぼくVに頼む。再度の依頼に「少し不機嫌に」なったへぼくVは、「絵はかけない」と返事する（二三八頁）。だが王子さまは、「そんなこと、たいしたことじゃないよ」（二三八頁）と応答し、「ヒツジの絵をかいて」と執拗にせがむ（二三八頁）。ヒツジの絵をかいたことがなかったへぼくVは、進退きわまつて、自分にかける「ただ二枚の絵の片方」、すなわち「閉じたボア（ボアの外側）の絵」をかく（二四〇頁）。すると王子さまは、驚いたことに、こう言いな

つ。  
「ちがう、ちがう！ ボアにのまれているゾウなんか、ほしくないよ。ボアつて、とてもけんのだらう。それにゾウなんて、とても場所をふさぐものだらう。ぼくんとこ、とても小さいんだ。ヒツジがほしいんだ」（二四〇頁）。

王子さまは、ボアの外側の絵の内容を看破する。このあと、へぼくVはヒツジの絵をかく。だがそのヒツジは、「病氣」であったり、「ツノがはえてい」たり、「ヨボヨボ」であったりすることで、王子さまを喜ばせない（二四〇頁）。飛行機の修理に早くとりかかりたいへぼくVは、我慢しきれなくなつて、三つの穴のあいた長方形の箱の絵を半ば投げやりにかく。

「——これは箱だよ。君のほしいヒツジはその中にいるよ。」

しかしほくの幼い裁判官の顔が輝くのを見て、ぼくはとても驚きました。

——まったくこんなのが、ぼくはほしくてたまらなかつたんだ。このヒツジには、草がたくさん要ると思う？

——どうして？

——だって、ぼくんとこ、とつても小さいから……

——きつと充分だと思ふよ。すぐくちっちゃなヒツジをあげたんだから。

王子さまは絵のほうに首をかしげました。

——そんなに小さくないよ……おやつ！ 眠っちゃったよ……」（二四〇—二四一頁）。

王子さまは、へぼくVがかいた、穴のあいた箱の絵を見て満足する。ふつうの大人たちであれば、そんな絵を見ても、中にヒツジがいるなどとは想像もしないだろう。だが王子さまは、「このヒツジには、草がたくさん要ると思う？」と訊いているところや、「おやつ！ 眠っちゃったよ」とつぶやいているところからわかるように、箱の中にヒツジを見いだし、それをいつくしむ。

柳沢淑枝氏は、王子さまがボアの外側の絵や箱の絵を解するという事実を、「こどもの想像力」によつて説明する。すなわち「こどもの想像力はつねにうわべのリアリズムから解放されており、その翼を大きく広げて伸びやかに飛翔できるので<sup>(18)</sup>」と述べている。たしかに、ボアの外側の絵から、中に呑みこまれたゾウを認めさせるもの、箱の中にヒツジを見させるものは、王子さまにそなわった、類いまれな「想像力」である。しかしこの事實は、王子さまが、うわべ見かけだけでものごとをとらえる大人たちとはちがつて、心でものごとを見ることができるといふことでも同時に示している。ともかく、王子さまがへぼくVの絵をはじめて理解してくれる人として、といふことはすなわち、へぼくVのことをわかつてくれ、そしてほんとうの意味で話しあえる、唯一の、かけがえのない友だちとして登場したことはたしかである。第二章のさいごの、「こうしてぼくは、王子さまと知りあいになりました」（二四一頁）という文は、へぼくVの絵をきっかけとして、へぼくVと王子さまとのあいだに、友情が芽生えたことを物語っている。

(2) 王子さまとへぼくVとの類縁性

ところで、王子さまがへぼくVの唯一の、かけがえのない友だちになる理由として、この二人が類縁性をもった存在、基本的に同一の次元に身を置く存在であることが挙げられる。ここで、二人の類似性を取りあげることしよう。第一に、王子さまとへぼくVとは、どちらも孤独な人間であり、ひとりぼっちのなかで友だちをもとめている。王子さまの孤独にかんしては、この論文の第一部第二章・第三章で見たように、王子さまが彷徨と探求の旅をつづけるなかで、それは深化していた。王子さまが友だちをさがしていることについては、作品第十九章のへこだまVの挿話において、高い山に登った王子さまが岩々に向かって、「友だちになつてよ、ぼく、ひとりなんだ」(二八九頁)と呼びかけているところからうかがえる。語り手のへぼくVの孤独は、前節で概観したとおりである。

第二に、王子さまとへぼくVとは、ともに大人たちを批判する側に立っている。王子さまのへ大人批判Vは星めぐりの過程で認められた。王子さまはすでに論じたように、王さま、うぬぼれ屋、飲んだくれ、実業屋の星を訪ねることによって、段階的に大人批判の度合いを強めていく。四番目の実業屋の星をあとにした王子さまは、「おとなつて、まったく完全に変わっている」(二七五頁)と考えているごとく、大人にたいする批判的な観点を完璧なかたちで培う。語り手のへぼくVもまた、ボアの外側の絵が大人たちに理解されなかったことと関連させて、彼らにたいする批判的意見を表明している。「おとなたちは自分たちだけではけっして何ひとつわかりません。子どもたちにとって、いつもいつも説明しなければならぬのはうんざりです」(二三六頁)とへぼくVは言うのである。この言明をとおして、うわべ見かけによってしか、言いかえれば、目に見えるものによってしか、ものごとを判じることができない大人たちが批難されている。第一章のさいごの段落でも、同じ内容の大人批判が展開されている。

「少しものわかりのよさそうに見えるおとなに会ったとき、ぼくはいつも手もとに持っている第一号の絵(ボアの外側の絵)で、その人を試してみたものです。その人がほんとうに理解力のある人かどうか知りたかったのです。でもい

つも、△それは帽子だ▽という答えが返ってきたのです。そこでぼくは、蛇のボアのこと、未開の森のこと、星のことも話しませんでした。ぼくはその人の理解のおよぶ範囲に自分を合わせました。ブリッジ遊びや、ゴルフや、政治やネクタイの話をしたのです。するとそのおとなは、こんなにも思慮分別のある人と知りあえて、とても満足するのでした」(二三七頁)。

大人たちは、ゾウを呑みこんだボアを外側から描いた絵を、帽子の絵としかうけとらない。目に見えるものしか視野になりからである。ものごとをうわべに見かけによって速断するとは、心でものごとを見るができないこと、目に見えないもの(invisibleなもの)を把握することができないことを含意する。それゆえ、「かんじんなことは、目には見えない」ということを意識しない大人たちが批判されている。また、大人たちは「蛇のボア」や「未開の森」や「星」の話ではなく、「ブリッジ遊び」や「ゴルフ」や、「政治やネクタイ」の話を、△ぼく▽がするのを聞いて、大いに満足している。大人たちがこころの次元の話、精神的なことではなく、即物的な次元の話、肉体的なことさらにしか興味をもたない点、つまり見かけの世界にしか関心をいだかない点もまた、皮肉をこめて糾弾されている。

第四章では、△ぼく▽は、王子さまの星が小惑星、B-612番であると推定しながら、「おとなたちは数字が好きです」という命題のもとに、大人批判をおこなっている。その件りを読むことにしよう。

「おとなたちは数字が好きです。新しくできた友だちの話をして、おとなの人はかんじんなことについては、けっして質問しません。△その人はどんな声音をしているの?▽とか、△その人の好きな遊びは何?▽とか、△蝶々の採集をする人?▽とか、けっして言いません。△その人は何歳?▽とか、△きょうだいは何人?▽とか、△体重はどれくらい?▽とか、△おとうさんはどのくらいお金をかせいでいるの?▽とかいうようなことを訊くのです。そのときになってやっと、その友だちがわかったような気になるのです。おとなの人たちに、△バラ色のレンガでできていて、窓にはゼラニウムの鉢が置いてあって、屋根の上にはハトがいる、きれいな家を見たよ……▽と言ったところで、その家を思いえが



くことはできません。おとなの人には、△十万フランの家を見たよ▽と言わなければならぬのです。すると、おとなたちは、△なんてすてきな家なんだろう！▽と叫ぶのです」(二四五―二四六頁)。

この一節では、大人たちが、年齢、兄弟のかず、体重、父親の収入によって、他人を知ったような気分になること、価格の高さによって家のすばらしさをわかったつもりになることが疑問視されている。「数字」とは見かけの世界、物質的な世界、あるいは目に見える (visible) 世界を代表・集約するものであり、その「数字」に支配・呪縛された大人たちの在り方が攻撃の対象となっている。

山崎庸一郎氏は、家のとらえ方が大人と△ぼく▽ (子ども) とではちがつているという事実に着目し、経済学の用語をもちいて議論している。すなわち、「生産と流通のシステムを有する経済社会」においては、「金銭が表現する」「交換価値のみが重要なのであり、大人たちは、その「交換価値」、換言すれば、「商品としての価値」しか信じない。それにたいして、子どもは「事物の具体的な価値、ながめて美しいと思う価値、住んですばらしいと思う価値、つまり、美的価値や使用価値」を絶対視する、と論述している<sup>19</sup>。前に、飽くことなく星のかずを勘定する実業屋と王子さまとの対立から、矢幡洋氏の解釈にそくして、「交換価値」と「使用価値」との対立を見てとった<sup>20</sup>。この対立は数字の好きな大人と△ぼく▽との対立からも観察されるのである。また山崎氏は、△ぼく▽の家の描写の特徴に言いおよんで、「バラ色」、「ゼラニウム」、「ハト」という語に注意を喚起しつつ、「家は家自体として語られているのではなく、(…)事物の周辺部にあつて、その輪郭をほかし、それに光背のような輝きを与えるもの、つまり、事物をそれ自体より以上のもの、それを越える美へと送り返すように語られている<sup>21</sup>」と指摘している。氏によれば、△ぼく▽は事物の背後の美しさ、事物を越えた美しさに関心をいだき、敏感になっている。このことは、△ぼく▽が目に見えないものを把握する姿勢を有することを意味する。友だちの「声音」や「好きな遊び」に精通し、友だちが「蝶々を採集する人」かどうかを聞知しようとすることもまた、心でものごとを理解しようとする態度のあらわれである。ここでも、目に見えないものを感知しようと思せず、心でものごとを見ようとは思わない大人たちが

痛烈に批判されている。

語り手の△ぼく▽の大人批判をたどってきた。このように見てくると、王子さまは△ぼく▽の大人批判を継承するかたちで出現していると論定することができる。王子さまは星めぐりをし、大人たちへの批判的視点をやしなつたあと、キツネとの邂逅によって、「心でしか、ものごとはよく見えない。かんじんなことは、目には見えない」(二九八頁)ということを選び、体得する。作品の流れのなかでは、王子さまは語り手△ぼく▽の思想を共有・代弁する存在として登場している。アルベレスは『サン＝テグジュペリ』のなかで、王子さまを作者サン＝テグジュペリの「分身」とみなし、「自分にたいへん近くて、同時にたいへん遠い、あの△自分自身▽である」と規定している。<sup>(22)</sup>アルベレスは語り手と作者とを混同している。とはいえ、王子さまと△ぼく▽との類縁性に注目すると、たしかに、王子さまが△ぼく▽の分身的存在としての側面をそなえていると認知できる。

(3) 王子さまと△ぼく▽とのへだたり

けれども、王子さまと△ぼく▽との類似性が看取できるとしても、両者のあいだに微妙なへだたりが生じている点にも注意を払わなければならない。このへだたりは物語が進行するにつれて、つまり△ぼく▽が登場人物の機能を喪失し、語り手としての役割に徹していくにつれて、別の言葉でいえば、作品が一人称世界から三人称の世界に移行するにつれて、拡大していく。すでに第四章において、△ぼく▽は、王子さまとの思い出を、というより、王子さまの物語を本格的に語ろうとするに際して、「ぼくの友だちのことを、ここで描き出そうとするのは、友だちを忘れないようにするためなのです。(…)それにぼくも、もはや数字にしか興味をもたない大人たちと同じようになるかもしれない」(二四六頁)と告白し、そういう大人にならないために、「えのぐ箱とエンピツを買ったのです」(二四六頁)と伝えている。第四章の終わりでは、△ぼく▽は次のように打ち明けている。

「ぼくの友だち『王子さま』は一度も、くどくどと説明してくれませんでした。たぶんぼくのことを、自分と同じような人間と想像していたのでしよう。でも、あいにくぼくは、箱の中のヒツジを見ることはできません。どうやらぼくも、大人たちと少し同じなのかもしれません。ぼくは年をとってしまったにちがいありません」(二四七頁)。

△ぼく▽は、うわべ△見かけによつてしかものごとを判断できない大人たち、「かんじんなことは、目には見えない」ことを理解しない大人たちを批判しながらも、この箇所では、王子さまのように、「箱の中のヒツジを見ることはでき」と明言している。△ぼく▽は、自分が批判する大人たちの仲間に入りつつあること、自分が大人の属性をもつことを承認している。

第七章では、△ぼく▽は故障した飛行機の修理に気をとられているために、ヒツジが花を食べてしまうのではないかと心配する王子さまにたいして、満足な返事をする事ができない。バラの花のトゲのことを話す王子さまに、△ぼく▽はいい加減な受け答えをし、「ぼくはだいたいじなこと (choses sérieuses) にたずさわっているんだ」(二五四頁)と言いはなつ。王子さまは腹を立て、「まるで、おとなみたいな口のききかたをする人だな！」(二五四頁)と裁断し、足し算ばかりして、「おれはだいたいじな男 (un homme sérieux) だ」と口ぐせのように繰り返して、いばりくさっていた、「真つ赤な顔の先生」のことを引きあいに出す(二五五頁)。そして「人間」ではなく、「キノコ」にすぎないその「先生」に、△ぼく▽をなぞらえる(二五五頁)。王子さまは、△ぼく▽が花のことなど眼中にない「真つ赤な顔の先生」のように、人間らしさをもたないことを非難しているのであろう。王子さまは△ぼく▽を、こころの問題ではなく、即物的なことからしかかわりをもとうとしない大人たちと同列に置くのである。

このように、王子さまが作品の前面に出てくるにつれて、△ぼく▽の置かれた立場は、△ぼく▽が批判していた大人たちの立場にしだいに接近していく。というより、王子さまの目から見れば、△ぼく▽はすでにして、批判されるべき大人たちの側に位置する。とすれば、王子さまと△ぼく▽とのあいだに類縁性が認められるとしても、王子さまが△ぼく▽の分身的

存在であるとは必ずしもいえない。王子さまが、子ども時代の△ぼく▽であるとする見方は依然として成り立つかもしれない。しかし、王子さまと△ぼく▽との乖離を勘案すると、王子さまは、△ぼく▽の理想をになった存在であり、△ぼく▽の枠におさまりきれない存在、△ぼく▽を越えた存在、つまりひとり他者であるとみなしたほうが適切である。

#### (4) 出会いの意味

以上のことを前提にしつつ、△ぼく▽における、王子さまとの出会いの体験の意味を考察することにした。王子さまとの出会いは、大人の年齢に達している△ぼく▽に、子どものように、心でものごとを見ることの大事さを、「かんじんなこととは、目には見えない」という真理を、あらためて認識・痛感させたという点に、その意義がある。△ぼく▽が大人たちのだが中に身を置き、大人たちと付き合うなかで、即物的なもの、うわべ見かけの世界、目に見える世界にしか、注意をひきつけられなくなってしまう傾向にあるときに、王子さまは、子どもごころを持つことの大切さ、心でものごとを把握することの必要不可欠性、目に見えないもの (invisibleなもの) を感知することの肝要さを教示するために、△ぼく▽の前に出現したのだといえよう。

しかしながら、王子さまが△ぼく▽に知らしめることは、これだけにとどまらない。王子さまは、何よりもまず、愛することの重要性を教える存在ではないだろうか。第一部第三章で述べたように、王子さまの彷徨と探求の旅は、愛(すること)の意味ないし意義を認識するに至るまでの「感情教育」の軌跡であり、△愛の修業▽の旅である。△ぼく▽と王子さまとの出会いは、王子さまが△愛の修業▽を終え、愛をいわば受肉し、愛する存在となったあとでなされている。したがって、△ぼく▽は王子さまの身の上・遍歴を聞き知ることによって、さらには、語り手として、王子さまの彷徨と探求の物語を語ることによって、同時に、愛(すること)の意味または意義を会得することができる。

この点に関連して、王子さまとの出会いが、△ぼく▽の孤立と孤独のなかでなされていることは看過することができない。

△ぼく▽は文字どおりの意味でも、比喩的な意味でも、△砂漠▽の中に投げ出されている。そんなとき、王子さまが、△ぼく▽の孤独を癒やし、慰める友たちとして登場する。王子さまが、△ぼく▽の絵の唯一の理解者であることから、△ぼく▽のことをわかってくれる、かけがえのない友たちとなることは先に述べた。王子さまは△ぼく▽にたいして、孤独の同伴者としての役割をも果たしている。このことは、飛行士の△ぼく▽がサハラ砂漠に不時着した日の翌朝に、王子さまが△ぼく▽の前に出現すること、つまり△ぼく▽の孤立と孤独に呼応するかたちで現われるところから明らかである。

ルドルフ・プロット氏は『星の王子さまの心』において、△ぼく▽のサハラ砂漠への不時着を取りあげ、「飛行機の墜落」が「広い意味で、文明の墜落をも意味している」<sup>(23)</sup>と解釈している。そして「人間は技術にも、文明にも、最終的には頼れないし、人間は自分の力でしか命を救えないという体験を砂漠でしました」<sup>(24)</sup>と明言している。けれども△ぼく▽は飛行機の修理に成功し、フランスにもどるのだから、「飛行機の墜落」が「文明の墜落」を意味するとの解釈は行き過ぎであろう。サハラ砂漠への不時着は作中、△ぼく▽の孤立と孤独を完璧にし、王子さまとの出会いを用意するために機能している。それに、飛行機の墜落の体験は、「人間が自分の力でしか命を救えない」ことを教えるのではなく、逆に、人間が自力では「命を救」うことはできないことを、△ぼく▽に察知させているのではないだろうか。なぜなら、「命を救」うとは、孤独の地獄から脱出することでもあり、そうであるならば、△ぼく▽は「自分の力」ではなく、王子さまの出現によって、「命を救」われているからである。

△ぼく▽のサハラ砂漠への不時着に呼応するかたちで、王子さまが登場するという点だけではなく、王子さまの退場、すなわち、故郷の星への帰還が、飛行機の故障が直って、△ぼく▽が自分の国にもどれるようになった時点でなされるという事実にも留意しなければならない。飛行機の修理が完了したとき、王子さまは△ぼく▽に、「機械に欠けているものが見つかって、△ぼくはうれしいよ。君は自分の国に帰ることができるね……」<sup>(320頁)</sup>と言い、「△ぼくもきょう、自分のところにもどるよ……」<sup>(3210頁)</sup>と告げている。王子さまは、飛行士の△ぼく▽が飛びたつことができるようになったときに、

△ぼく▽のもとを立ち去る。王子さまの登場から退場までの時期は、△ぼく▽のサハラ砂漠での滞在期間と一致しているのである。

ここから、王子さまは結果的に、孤独の同伴者として、一人ぼっちの△ぼく▽に寄り添い、△ぼく▽を慰めるために現前していたことが再確認できる。王子さまは自分の身の上・遍歴を知らせることで、愛(すること)の重要性を△ぼく▽に自覚させるだけではなく、その存在じたいによっても、愛を教えているのではないだろうか。王子さまは、その存在そのものによって、孤独からの解放の糸口としての△愛▽を△ぼく▽に啓示しているように思われる。△砂漠▽のなかで生きる△ぼく▽にとって、孤立と孤独のなかで棲息する△ぼく▽にとって、王子さまは△愛▽じたいであり、△愛▽を体現した存在なのである。それゆえ、王子さまとの出会いは、△ぼく▽にとって、愛の出会い、愛との出会いであると論断することができる。

このことは、王子さまとの別れを直前にして、△ぼく▽がおそわれる悲しみの感情からもたしかめることができる。第二十五章において、王子さまが思いつめた様子で、「ねえ、ぼくは地球におりてきたんだが……明日はその一年目の記念日なんだ……」と伝えたとき、△ぼく▽は「訳もわからず」に、「奇妙な悲しみ」(un chagrin bizarre)をおぼえている(三〇八頁)。この「悲しみ」は、王子さまをうしなうことへの無意識の反応である。この章の終わりでは、王子さまから、「さあ、仕事しなくちゃいけないよ。機械〔飛行機〕のほうにもどらなくちゃいけないよ。ぼくはここで待っているよ。明日の夕方、またきてね……」(三〇八頁)と言われて、△ぼく▽はキツネのことを思い出し、泣きたい気持ちにかられている。この件りを引用しておこう。

「でもぼくは安心していませんでした。キツネのことを思い出していたのです。人は、飼いならされるがままになるとき、なにかしら泣いてしまいたくなるのかもしれない」(三〇九頁)。

△ぼく▽は、王子さまを愛したキツネと同じように、愛する人として、王子さまとの別れを予感しての悲しみに心を打た

れている。第二十六章では、王子さまとの別れが悲痛な調子で語られている。王子さまは、「夜になったら、星をながめておくれよ。ぼくんとこは、とてもちっぽけだから、ぼくの星がどこにあるのか、君に教えられないよ。でもそのほうがいいんだ。君はぼくの星を、星のうちの、どれか一つだと思つてながめるからね。すると、君は、すべての星をながめるのが好きになるよ……星はみんな、君の友だちになるわけさ」(三二三頁)と、別れの言葉を口にする。それにたいして、△ぼく△は、「ぼくは君のそばを離れないよ (Je ne te quitterai pas)」(三二四頁)という文句を三度も繰り返して、懸命に王子さまをそばにひきとめようとする。この文句は、王子さまといつまでも一緒にいたいと切願する△ぼく△の気持ちを端的に表現し、王子さまにたいする、△ぼく△の深い愛を際立たせている。

王子さまとの別離の悲しみは、第二十七章に挿入された二つの絵のなかに、感動的にかきこまれている。最初の絵は、自分の星に帰る寸前の王子さまを描いている。王子さまは砂漠のなかでたおれようとしている。王子さまの斜め上には、一つの星が輝いている。これは王子さまの故郷の星だと考えられる。王子さまは全身、黄色で描かれている。作中、△ビもまた黄色である。王子さまの黄色は、△ビの毒が体中にまわったことを示唆している。さて、二番目の絵は、王子さまが去ったあとの、誰もいない砂漠の情景を描出している。在るのはただ、砂漠を見下ろす一つの星だけである。この情景について、△ぼく△は、「これが、ぼくにとっては、この世でいちばん美しく、いちばん悲しい景色です」(三二二頁)と註釈している。これら二つの絵は、ただ一人の、かけがえない他者、△とともに△あるいは△のために△生きるべき他者と出会ったにもかかわらず、別れを体験しなければならなかった、愛する人の苦しみと悲しみを見事に表出している。

(5) 他の人物たちにとっての王子さま

前述のように、△ぼく△にとって、王子さまとの出会いは、愛の出会い、愛との出会いである。では、他の作中人物たちにとって、王子さまとの邂逅は何であるのか。このことを検討することにしよう。まず、バラの花の場合であるが、バラは

王子さまを愛するので、彼女にとつての出会いはもちろん、愛の出会いである。しかも王子さまは、バラの花が待つ故郷の星に帰還するために、命を犠牲にするのであるから、バラにとつて愛そのものである。王子さまとの出会いは愛との出会いでもある。

王子さまに愛（すること）の意味ないし意義を教えたキツネにおいても、同じことがいえるのではないだろうか。というのも、キツネは王子さまに友情をもとめ、かけがえのない友だちとして王子さまを愛するからである。孤独のなかで棲息するキツネにとつて、王子さまは、自分の孤独を溶かす存在であり、愛じたいなのであろう。

さらに、星の住人たちにとつても、王子さまとの出会いは愛の出会い、愛との出会いになりうるのではないだろうか。星の住人たちが孤独な人間であることは、すでに述べた。第十二章、王子さまが飲んだくれを訪問する場面を想起しよう。飲んだくれは、酒を飲むことの恥ずかしさを忘れるために酒を飲む。そんな飲んだくれを目のあたりにして、王子さまは飲んだくれを「気の毒に思」い、「救つてあげたいと思」う（二七一頁）。だが飲んだくれは酒を飲みつづけ、「沈黙」の中に、孤独のなかに閉じこもつてしまう（二七一頁）。もし飲んだくれが王子さまに心を開いていたら、王子さまは飲んだくれを、その弱さとみじめさから、就中、孤独から救い出してくれる、かけがえのない友だちになっていたかもしれない。しかし飲んだくれは王子さまの愛を拒絶し、自分の殻にこもる。したがつて、飲んだくれにおいて、王子さまとの出会いはほんとうの意味での出会い、愛の出会い、愛との出会いにはなりえない。王子さまは単なる行きずりの人にすぎなくなつてしまう。とはいえ、飲んだくれにとつても、同様に、孤独を生きる他の星の住人たちにとつても、王子さまが△愛▽の存在、△愛▽を体現した存在であることは間違いない。王子さまを外側からとらえるとき、誰にとつても、王子さまは△愛▽であるように思われる。死をもたらすという点で、ヘビが死の使者であると規定できるとすれば、王子さまは△愛▽の使者であるという言い方もできる。王子さまとの出会いが、真の出会い、愛の出会い、愛との出会いになるかどうかは、作中人物のおのの気持の持ち方に、内面の姿勢いかにかかっているのである。



註

- (1) 目次のなかの、第一部第三章の(1)までの部分は、『星の王子さま』の読みへの招待(一)(二)として、山口大学「独仏文学」第二十三号(二〇〇一年十二月)、および、同「文学会志」第五十二卷(二〇〇二年三月)に発表。
- (2) 山崎庸一郎：『星の王子さまの秘密』彌生書房、一九九四、一〇七頁。
- (3) 柳沢淑枝：『このころで読む「星の王子さま」』成甲書房、二〇〇〇、一二四頁。
- (4) 中谷拓士：「内面のルポタージュとしての『Le Petit Prince』」『年報フランス研究』(関西学院大学)第七号、一九七三、一三頁。
- (5) Pierre-Henri Simon: «A la rencontre du Petit Prince...» in *Saint-Exupéry, coll. Génies et Réalité*, Hachette, 1963, p.191.
- (6) 山崎庸一郎：『星の王子さまの秘密』、一一五頁。
- (7) ルドルフ・プロット：『星の王子さまと「心のきょう育」』パロル舎、二〇〇〇、一七二頁。
- (8) 山崎庸一郎：『星の王子さまの秘密』、九八頁。
- (9) (10) 矢幡洋：『「星の王子さま」の心理学』大和書房、二〇〇〇、一六〇頁。
- (11) 山本武信：『星の王子さまからの警鐘』共同通信社、二〇〇〇、二三二頁。
- (12) 山崎庸一郎：『星の王子さまの秘密』、一〇二頁。
- (13) 同右、一二二―一二三頁。
- (14) 柳沢淑枝：『このころで読む「星の王子さま」』、一四九頁。
- (15) ルドルフ・プロット：『星の王子さまの心』パロル舎、一九九四、二〇六頁。
- (16) 同右：『「星の王子さま」と聖書』パロル舎、一九九六、五七頁。

- (17) Pierre-Henri Simon: «A la rencontre du Petit Prince...», p.203.
- (18) 柳沢淑枝: 『ところで読む「星の王子さま」』、三二―三三頁。
- (19) 山崎庸一郎: 『星の王子さまの秘密』、八二頁。
- (20) 本論文第一部第二章の(1)、『星の王子さま』の読みへの招待(二)、山口大学「独仏文学」第二十三号、一五頁を参照。
- (21) 山崎庸一郎: 『星の王子さまの秘密』、八三頁。
- (22) R.-M. Albères: *Saint-Exupéry, Edition entièrement refondue*, Albin Michel, 1961, p.159.
- (23) (24) ルドルフ・プロット: 『星の王子さまの心』、三四頁。
- (25) ただし、岩波書店から刊行されている翻訳本では、この二枚の絵は、第二十六章の終わりと第二十七章の終わりに置かれている。